

---

# 進藤家の人々

れおまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

進藤家の人々

### 【ZPDF】

Z0460Z

### 【作者名】 れおまる

### 【あらすじ】

### 【立場とオチと意味】

- ・この小説に無いもの

## 1・巽の朝（前書き）

### 人物紹介

進藤紅音…22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太…21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽…17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ氣苦労が絶えない。

進藤みどり…16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児…10歳小4O型。三男。脳天氣で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎…48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子…46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

1  
・異の朝

目を覚ますとまだ7時前だつた。

そして、俺が起きた瞬間に目覚まし時計が喚きだしたので、手刀で黙らせる。

ふつふつふつ・・・勝つたぞ！」

ずっと連敗し続けだつたが、遂に白星を勝ち取つたんだ。

朝っぱらから満面の笑顔で制服に着替えて自分の部屋を出た。

「おみやげ？」

た。

田の前には1階へと続く無情な道が広がっている。

落ちたら無事では済まないと必死で体勢を立て直すが、寝起きでまだ覚醒していない体は言つ事を聞かなかつた。

「...」  
「...」

そのまま階段を転がり、顔面から無事に着地した。  
いや、無事じゃなくて無様というべきか。

「ふあああ・・・お、異派手にやつたな」

階段の上で足を投げ出して寝ていた姉ちゃんが、欠伸混じりに話しあけてくる。

・・・あなたの仕業か、俺が躓いたのは。

「寝るなら布団で寝ろって言つてるだろー。」

「あつはつはつ、悪いね。疲れちゃつて部屋に戻るの面倒でもあー

悪怯れる様子も無く寝癖でぼぼぼこなつた髪をかきながら笑つて  
いる姉ちゃん。

進藤紅音  
あかね

5人兄弟の長女にして唯一の社会人だ。

とにかく大雑把で適當で、あと大雑把。

俺は大雑把という単語を見付けると心の中で姉ちゃんと呼ぶ。  
基本的に5分以上難しい事を考えると頭がショートしてしまつ、思  
案という言葉とは無縁の姉上である。

酷い目に遭わされたものの、よく見なかつた俺も悪いのでそれ以上  
は何も言わなかつた。

「朝から騒がしいわね巽」

「あ、おはよう母さん」

「今日は早いのね。丁度ご飯出来たところだから食べなさい」

「うん」

ちょっととしたアクシデントはあつたものの、出来たての食事は美味  
しいのでやつぱりついてる。

5つ並んだ椅子の真ん中に座つて、両手を合わせた。俺の場所はい  
つもここだ。

湯気がたつているハムエッグをひとかけら口に入れたところで、姉  
ちゃんと兄貴が降りてくる。

「おはよー、兄貴」

「おはー。どうした異、おでこに痣が出来てるだ」

「ちょっとね・・・」

言葉を濁しつつ姉ちゃんを睨むと、原因を察したのか兄貴は呆れた様に笑つた。

進藤蒼太  
（しんとう そうた）

5人兄弟の2番目で長男、今年で大学2年生になる。  
それなりには喋るけどあまり口づるわけは無くて、几帳面で頼りになるのだ。

姉ちゃんすら頼りにするくらいなので、ある意味5人兄弟のトップといつてもいい。

姉ちゃんは左端、兄貴はその隣に座る。5つある椅子のそれぞれの位置だ。

別に誰がどこだと決めた訳じゃなくて、小さな頃から我が家ではこれが当たり前だった。

「おはよう、みどり」

えつ、みどり？

兄貴の言葉に首を傾げながら右に振り向くと、既にみどりが座つていた。

「お前いつからいたんだ？」

「・・・ついさっき」

みどりは目線を動かさず答える。

よく気付いたな、兄貴。いつからいたのかさっぱり気付かなかつたのに・・・

### 進藤みどり

5人兄弟の4番目で次女、今年で高校に入学した。  
兄弟の中では一番無口で表情もあまり変わらない。特技は気配を消すこと、らしいが・・・

「腹へつた～～～！」

みどりとは対照的に、あいつが朝から大きな声を上げながら階段を掛け降りてきた。

どすんどすんと床を響かせ、空いていた最後の右端の椅子に座る。

「あかねえ、そつこい、たつこい、みどねえ、おはよう！～」  
「ママが抜けてるわよ、黄児。元気がいいわね」  
「やうだつた！～おはよつ母ちゃん！～」

### 進藤黄児

5人兄弟の5番目で3男、今年で小学4年生になる。

元気いっぱい一番うるさい、進藤家の太陽みたいな存在だ。  
食いしん坊で口々口々に太っている。

素直で純粋なので、家族で一番愛されているかもしれない。  
だから、屈託の無さを持ったまま大きくなると姉ちゃんとみたいにならないか心配だ・・・

「行つてきまーす」

「1」馳走様。じゃあ母さん、行つて来るね

姉ちゃんと兄貴が早々と食事を済ませて家を出ていった。

俺とみどり、黄児とは違つて出勤及び通学に時間がかかるから仕方

なこのだ。

「・・・・・・・つこてる」

「おこしこよ」れー！みどねえちゅうだいー！」

口のまわりに食べかすをいっぴい付けて朝食を頬張っている黄児。みどりに世話を焼かれているにも関わらず、食べかけのハムエッグを奪った。

まったく食い意地の張つた奴だな。自分のだけじゃなく、姉ちゃんのまで奪うなんて・・・

困った奴だが、黄児の皿をうに食べる顔を見ていると何だか癒されてしまう。

「やばい、もう時間だ」

「黄児・・・」

「まだ腹一杯になつてないぞ！――

「どんだけ食うんだよ。それくらじこひとか」

時計は8時10分前を指している。もう行く時間だ。

どんぶりに3杯田のおかわりをよれおつとする黄児を、みどりと二人がかりで玄関まで運んだ。

「じゃあ行つて来る、母さん」

「氣をつけでねー」

父さんは今日も書斎に籠もつたままか。

ちゃんと仕事をしているつて事だから、喜ぶべきだな。

普通のサラリーマンなら説教しなきやならない反社会的な行為だけだ。

高校は隣駅にあり、歩いて通える距離だった。俺とみどりはそこを通っている。

「…………」

特に自分から話し掛けっこず、みどりはただ黙々と歩いていた。別に今朝に限つた事ではなくていつもこんな感じだ。  
姉ちゃんや黄児並みに喋つたら明らかにおかしい。

もしさうなつた暁には何かが憑依したとみて目の色を確認するべきだな。

歪んだ形で願いを叶えようとすると、実体を持たない異形の存在の仕業に違いない……

「…………お兄ちゃん」

「なつ、なんだ?!」

軽い妄想に耽つていたところを呼び掛けられ、不審な声を出してしまひ。

「危ない…………」

みどりの言葉の直後、俺の体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。  
すぐ傍にあつた壁に激突してしまう。

「ぐほおおおお……」

「いたいた、探したよみどり。はいこれ  
…………後でいいつて言つたのに」

俺を跳ねた真っ赤な車から出たのは、クソ野郎ことお姉様だつ

たのです。

で、あるいは事か相手を無視して口々口をみどりに渡しています。

「じゃあね、みどり」

「遅刻しないでね・・・」

「おいで！―せめてごめんくらい言えや！―」

「ん？あ、いたの異。さつさと学校行きなさい。学生の内から遅刻

してるんじや社会でやつてけないわよ」

「轢き逃げして悪知れないと社会人どころか人間として失格だらうが！―」

しかし姉ちゃんは無視して走り去ってしまった。

「お兄ちゃんは強いね、車にひかれても痣だけで済むから

・・・ま、慣れてるからな」

慣れたくはないけれど、実はこうこう田に遭うのは初めてじゃない。今年だけでももう5回田だな。いずれもあの素晴らしいお姉様が加害者だ。

まったく悪気が無いのがもう、物凄い腹立つ。いくら姉であっても許せないね。

おかげで体が鍛えられてるけど、絶対に感謝なんかしないからな。

「あ、学校・・・」

校舎が見えてきた。

なんだ、結局今朝も代わり映えがしなかつたじやないか。

こんな感じで、俺の1日が始まるのだ。

（ 続 ）

## 2・みどりの好きな物

基本的に妹のみどりは少食である。

うちの兄弟はわりとよく食べる方で、特に黄児は大好きなカレーは4杯おかわりしないと食べた気がしないと言っている。だが成長期であるにも関わらず、みどりはあまり食べない。

母さんに、黄児と胃袋を交換すればお互いに丁度いい体型になれる、と言われる程だった。

おいしいとも不味いともあまり言わないでの、兄貴である俺から見ると食事にあまり拘りが無い様に思える。

「あつ、あれはなんだ？！」

「なんだよ？」

「スキあり！貰つたぜ異、怪盗ルパン参上！」

「おいこらー！返せ！..」

晩飯時、またしてもお馬鹿な姉上様に奪われてしまつ。

それだけでも頭にくるのに、自分の好きな衣サクサクのメンチカツとあれば怒りも激しく湧いてくるというものだ。

まだ黄児であれば怒つたりはしないが、もう働いて何年も経つ大人のやる事かと思うと、悲しくて情けなくなるよ僕は。

「ぬほほほほ、勝利のメンチカツじゃー」

「やめろ！！ソースを浸すな、衣が柔らかくなるだろー！今すぐメンチカツに謝れ！」

お前をソース漬けにしてやるうか、そこの進藤紅音めーーー

俺とお前は分かり会えない。揚げ物は衣いに命、それを血ぢりふにまふにやにするとは信じられないぞ！

「人の食い物を取るなこの野蛮人！」

「ねえ蒼太、あんた彼女出来たの？今のつむけ遊んどかないと後悔するよ」

「俺を無視すんな！」の野郎、いつじてやるー。

お返しにコロッケを奪おつとしたら、箸を落とされてしまった。

「甘いな、坊や。出なおしてこいや、おつ~」

今日も騒がしい姉ちゃんと俺をよそに、みどりは黙々と箸を動かしていました。

隣の黄児に食い物を取られても、淡々と「行儀悪いよ」と注意するだけで、全く怒る様子はない。

黄児であってもしメンチカツを奪つなり、俺は本気で怒つてしまつと思う。

みどりは怒らないだけでちゃんと悪い事は注意するが、もし好きなものを奪われたら怒るのだろうか？

普段の食事でも表情を変えないみどりが好きな物。

それは・・・

「ただいまー」

「お帰り異。おやつあるわよ

椅子に座ろうとしたらい、すでにみどりがいた。

俺よりも早く帰るなんて珍しいと思ったが、今日は水曜日だから部

活は休みだったな。

「ただいま、みどり」

しかし返事どころか反応も無い。  
まあ、みどりは元からそつだな、と思いつながら座った。

テーブルに置かれていたのは、葉っぱに包まれたあのスイーツだつた。

・・・いや、スイーツって言葉は雰囲気的にちよつと似合わないかな。

みどりは、柏餅を前にしてここにひと微笑んでいた。  
好きな物を前にしてとても嬉しそうにしている。

とは言つても他人が見たら多少口角の角度が吊り上がっている程度にしか見えないかも知れない。

この表情が笑顔だと認識出来るのは、きっと家族が親しい友達だけだろう。

「・・・・・・・・・・・・

ようやく俺に気付いたのか、みどりは恥ずかしそうに口元を隠してしまった。

自分でも笑つてこるところ自覚はあるらしい。

「お、お帰りなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、みどり」

やつぱり女の子だから甘いものは好きだよな。  
でもケーキじゃなくて和菓子ってところが、なんだかみどりらしい。

みどりはそそくせと葉っぱを剥がして、スプーンで柏餅をひとかけら掬つた。

ゆっくりと口に運び、更にゆっくりと噛み締めている。

普段はただ食べ物を口に入れているという感じだけど、この時だけは違う。

「・・・・・・・・・・」

見るより食べる方が幸せだらうな。

今の表情は他人が見ても嬉しそうだと分かる。

食事は量じゃなくて質、というタイプだ。

見ていてるといつちまで幸せな気分になつていいく様な気がする。

うちの馬鹿なお姉様も少しくらいは見習つてほしによな・・・まつたく。

～～続く～～

### 3・黄児の夢（前書き）

兄弟の中で一番夢があるのは、おそれらへ黄児だ。

「世界中の国にあるプリン食べたい！」

「山より大きな口ロッケ食べたい！」

「学校のプールいっぱいに入ってるラーメン食べたい！」

などと、必ず語尾にそれがおれの夢なんだ！と皿をきりきり輝かせて言つ。

夢を見るのは自由だから、実現出来るかどうかはさておきこかにも子供らしく可愛く夢だ。

「よーしょー、お前は純粋だな黄児いー」

皆に可愛がられる体质の黄児だが、特に姉ちゃんに気に入られている。

大きなお腹を撫でるのが好きらしく、抱きよせながらいつも手でタブタブしていた。

普通、太っている子供は体に触られるのを嫌がるものだけど、黄児は姉ちゃんにだけは許してもららしく。

「もしあかねえが悪い奴にさらわれたらおれが助けるからな」

「おお、そうか。それは嬉しいねー」

「悪い奴からみんなを守りたい。それがおれの夢なんだ！」

「無理だな。黄児」

「なんでだよたつにいーおれは愛と平和を守るヒーローなんだぞー！」

「だつて・・・お前の隣にいる奴はとびっきりの悪党だぜ。人の食

い物を盗む、世界一の悪党だ」

「なんだって？！あかねえは悪い奴だったのか？！」

「これこれ異君、未来のヒーローに何を吹き込んでいるのかね」

「覚悟しろ！くらえ、タカ！トラ！バツ・・・うわっ！」

興奮してテーブルに上がり、必殺技を繰り出そうとした黄児が勢い余つて落ちた。

「おい、大丈夫か？」

「こ、転んでもいいよ、また立ち上がるればいい。ただそれだけできれば、英雄さ！」

ヒーロー番組の主題歌の歌詞らしき言葉を口ずさみながら、起き上がった。

偉いぞ、痛いだろ？に決してそれを見せようとしたんだからな。

「あんたより打たれ強いかもね、異」

「つるさいよ怪盗ルパン」

「覚悟しろー！」

まだ立ち向かってくる黄児を宥めながら、姉ちゃんは笑っていた。日曜日の朝、起きたら珍しく姉ちゃんがもうリビングにいた。どういう風の吹き回しなのかと思つたら、黄児と格闘ゲームで対戦している。

「ちょ、ちょっとあかねえ、強いつて…やりすぎだよ、うわわわわわ！」

黄児の操る力士が、姉ちゃんの操る紅頭巾の女の子に刃でザクザク切り刻まれていた。

はは・・・日曜の朝からこいつこいつスプラッタなものは刺激が強いよな・・・

それにもしても、少しは手加減してやれよ。大人のくせして本当にろくなもんじやねえな、姉ちゃんは。

「どうした黄児。お前の力はその程度か?」

「ずるいぞあかねえ!おれ、このゲームやつた事ほとんど無いのに!」

「こりゃ、師匠と呼べと言つたはずだぞ!修行したいと頭を下げたのは誰だ!」

「うつ・・・そ、それは・・・でもさ、ゲームやつて修行になるの?」

「当たり前さ。凡人にとっては遊びであつても、達人には修行になるのだ」

相変わらず胡散臭い姉上様ですわね。

まあ姉ちゃんの真意なんて知つたことじゃないが、歳の離れた弟と遊んでやるなんて面倒見のいいところもあるのだ。あまり離れてない俺は散々な扱いだけど・・・・・

「どうだ黄児、まだ続けるのか?」

「他のゲームしようよ。おれもう飽きた」

「ふん、そうか。所詮お前のヒーローになりたいといつ夢はその程度だつたんだな」

「なんだとーーーもう1回、いや勝つまで続けるぞーーー」

「そうだ、その心構えは大切だな」

気合いを入れ直して再び姉ちゃんに挑む黄児。

その甲斐あつてか最初から姉ちゃんの操るキャラを手数で押していく。

「へえ、多少は手応えが出てきたな」

「絶対に負けないぞ！おれはヒーローになるんだ！」

・・・あんなにひた向きに頑張るのが羨ましい。

俺には何かあるのだろうか？誰にも譲れない、いわば芯となる様な物を持つているのか？

「あら～ひ、ねえ黄児？カツ丼お～じつあげるから手加減してほしいなあ」

・・・なんという情けない姉上様だ。

あいつはもう人間じゃない、虫だ。

ああはならない様にしよう。

姉ちゃんをボコボコにして氣を良くしたのか、黄児は外でトレーニングしたいとジャージに着替えた。

寒いのに良くやるな。

「頑張るな、黄児」

「うん…やつぱりヒーローなら強くならなくちゃ…走つてくんなー…」

「待つてくれ、俺も行きたい」

「ホント？分かった、一緒に走ろうつたつにー」

たまには弟の面倒を見てやるのも悪くない。

黄児といふと正直疲れるんだけど、その分元気を貰えたりするからな。

掛け合つたお氣に入りの黒いジャージに着替えて、黄児と共に家を飛び出した。

俺とは違つて夜中でも田立ちそつた、自分の名前と同じ黄色いジャージを着ている黄児。

名前も性格も明るければ好きな色も明るい、それが俺の弟だ。

「1、2、3、4つ！」

一歩ずつ走る毎にカウントしている。

太ってるのになかなかフットワークが軽いので、他人が外見だけで判断すると痛い目に遭うだろうな。

世の中には動けるデブもいるどこの有名人が言ってたが、黄児は典型的なそのタイプに間違いない。

「・・・・・！」

急に振り返り、来た道を戻り始めた。

忘れ物かと思つたが家までは戻らず、全く違うコースを走っていく。

「どうしたんだ黄児、いきなり道を変えるなんて」

「嫌なんだよ・・・あっちの家、いつも通ると犬が吠えるんだ」

「ふうん、だから急にヒターンしたわけか」

「わ、笑うなよたつにい・ヒーローにだって怖いものはあるんだぞ！」

「そりやあ、そうだな。

完璧な人間なんてもしいるなら見てみたいよ。

誰しも必ず欠点や怖いものはあるんだ。

姉ちゃんは容姿はそこそこだと思うけどあの弟を何とも思わない残念な性格。

兄貴は普段は冷静だけど酒癖が悪いところ。

俺は、良くも悪くも色々と無難だと母さんに言われた。みどりは、感情があまり表に出ないとこらかな。

「でももしその犬が悪い奴らに襲われてたらどうする？」「ちゃんと助けて、でも怖いから逃げるよ」

・・・頑張れ黄児。ヒーローになれるまでの日まで。

～～～  
続  
～～

### 3・黄児の夢

#### 人物紹介

進藤紅音…22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太…21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽…17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ氣苦労が絶えない。

進藤みどり…16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児…10歳小4O型。三男。脳天氣で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎…48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子…46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

#### 4・蒼太の変貌

兄貴はとにかくよく周囲を見ている。

「あら？お砂糖どこかしら」

「はい、母さん」

料理の途中調味料をどこに置いたのか分からなくなつた母さんを、  
せり気なくフォローしたり

「あれ？！私の携帯どこ？誰か知らない？！」

「姉さんがさつき自分でテーブルに置いてたよ」

「あ、あははは、そつかそつか、トイレに入る前に置いたんだっけ」

まだ二十代の入り口で既にボケが始まっている姉ちゃんに優しく対  
処したり

「蒼太兄さん、この問題なんだけど・・・」

「うん、これは2つの方程式を使えば解けるな」

分からぬ問題を聞きに来たみどりに、分かりやすく的確に教えた  
り、俺から見たら頼りになる人物だ。

モデルみたいな整つた顔立ちに細身の体型で、好きな青い色のシャ  
ツを見事に着こなしてしまつ。

そして誰に対しても優しく穏やかな口調で話すので、兄貴と接して  
嫌な印象を持つ様な奴はまずいない。

まさに理想の兄貴だ。

こんな立派な身内がいるのは素晴らしい事だと思つ。

しかし、あくまで素晴らしいのは進藤蒼太自身であり、別に俺の評価には繋がらないと考えると、虚しいものだ。

そんな卑屈にならなくてもいいか、はは・・・

「今日も寒いなあ・・・・・・参っちゃうね」

細長い指や美しい手を擦り合わせるその仕草・・・  
もし、もしも俺が女の子だったとしたら、異ではなく立美ちゃんだったとしたら、もう萌え死んでいたに違いない。  
いやいや、違いますよ。僕はれっきとした健全な男の子です。  
夏服の透けるブラに興奮してしまつピュアな高校2年生なんですか  
ら。

勘違いしないでいただきたいであります！

だが、神様というのは悪戯が大好きな人だ。  
それも、子供よりもずっと残酷な悪戯を好む。  
容姿端麗、文武両道な兄貴にも欠点を作つてしまつたのだ。

以前ちよこつと触れたかと思うが、完璧な人間というのはこの世に存在しない。

でも、さあ・・・・・・これは酷いだろ、なあ神様よお？あ？ああん？

「おう、蒼太。付き合つか

「うん。いいよ姉さん」

食後のこの会話で俺を含めた全員が凍り付いた。  
お願ひだ姉ちゃん、やめて。ホントに止めてください！

姉ちゃんは家族の思いをよそに冷蔵庫から焼酎を取り出し、勢い良くテーブルに置いた。

「あ、ダメ。兄貴のグラスに注がないで、お願ひだから。

しかし兄貴は躊躇う事もなくそれを傾けた。瞬時に動きが止まり、目が座る。ああ・・・もう俺の知っている優しい兄貴はいないんだ。

「ケツケツケツケツ、いい気分だぞ〜」

兄貴は下戸なのだ。

おまけに酒癖が悪く、普段の優しい人格が眠りについてしまう。代わりにとんでもない人格が目を覚ますのだが、それは飲む度に変わるので家族である俺達ですら、直前までどうなるか分からぬ。今日は多分、良く笑いそうな感じだな。

姉ちゃんはそれが樂しいらしく、わざと酒を飲ませる。

なつ？クズだろこいつ。こういつマネして、何が樂しいんだろうな？

俺達は柱の影から様子を伺っていた。

触れたら火傷じや済まない。遠くから見守るに限る。

「おい姉さん、何か面白い話は無いのか？」

「あるよ。布団がふつとんだ、なーんつってあひゃひゃひゃひゃひゃ」

「や

すでに姉ちゃんも出来上がっている。

だが、兄貴はそれ以上に目が据わっていたのだ。

「何がおかしい？」

「おかしいでしょ、あひやひやひやひや。布団がふとんだんだよ  
ばーんって！」

「何がおかしいのかと聞いている！幼稚すぎるんだよお前つて奴は  
！」

「なんだとお～蒼太あ～。姉さんのギャグがつまらんだとお～」

笑っていた姉ちゃんも目が据わっている。

今すぐに焼酎のビンを割つて凶器にしてしまった程、極悪な顔  
をしていた。

2人とも会社やサークルで飲み会に誘われなくなつたとぼやいてた  
が、これでは仕方ない。

家族ですら近寄りたくないのに、同僚や友達なら尚更だろ？な。  
頼むからせめて楽しいお酒にしてくれよ・・・笑うのが一番だぜ、  
何にしてもな。

「・・・！」

その時、テーブルの携帯が鳴った。

あれは俺のだ。回避を優先してて、肝心な物を持つてくるのを忘れてた。

ほつとけばいいのかもしねないが、俺の周りは電話に出ないといふ  
行為を嫌がるやつが多い。  
嫌だ、友達を失いたくない・・・っ！

俺は意を決してリビングに向かう事にした。

「お兄ちゃん・・・」  
「大丈夫さ、みどり。必ず生きて帰る」  
「お墓に好きなゴーラかけてあげるね」  
「巽、毎日メンチカツお供えするから」  
「たつにい、俺もちやんとお参りするからー！」

・・・なんで生きて帰れないのが前提なの？

そりや目の前は龍と虎が睨み合つてて、飛び込む俺はウサギみたいなものだが。

いやいや気配を消せば問題ない。ほら、俺は石です。路傍の石です。

一  
異

姉ちゃんのドスの利いた声に震え上がり、足が竦んだ。  
手を伸ばせばそこに携帯があるので身動き出来なくなつた。

酒が悪いんだ。

「なに?」

呼んだけ

そういうと姉ちゃんは笑い転げた。

椅子から落ちても腹を抱えて笑っている。

わいわと携帯を取つて逃げよう。長居は無用だ。

「異」

しかし、もう一匹の猛獸が優しく声をかけてきた。

ええ、强行突破だ。一匹だけならなんとかなる！

「ど」へ行くんだあ～

「うわああああああ～？」

やめる、抱き付くな～うわつ酒臭い、やめる～。  
せっかく携帯を手にできたのにこれじゃ・・・！  
まだ鳴り続ける、こうなればこのまま出てやるだ。

「・・・・・！」

・・・切れた・・・

呼応するかの様に、俺の体から力が抜けていった。  
もうどうでもいいや・・・

「おやすみ」

兄貴は抱きついたまま寝てしまった。

俺は酒なんか飲まない。

～～続く～～

## 5・紅音の長所

人間、誰しも長所のひとつくらいはあるものだ。  
光があれば影がある様に、欠点があれば長所もある。

・・・うちのお姉様を除いては、な。

ていうかこの人のいいところって何? 真面目に聞きたい。

兄貴は人当たりが良く優しい」ところ、みどりは物静かで一緒にいる  
と気を使わなくて済むところ

そして黄児は底無しの明るさがあって、見ると自然に癒されると  
ころ・・・

母さんは料理が上手だし俺達兄弟の好みに合わせた完璧な味付けが  
できる。

父さんはみどりに負けない位静かだが、人を笑わせるのが好きらし  
く少ない会話でも小ボケを挟むから話して面白い。

でもこのク、いやいや素晴らしいお姉様にはいいところなんか何一  
つありはしないと思づ。

ここ数日の行動を見ても朝っぱらから俺を階段から落とす、それから車でひくけど氣付かない、

俺の大好きな食べ物を奪う、黄児にゲームで勝てないから食べ物で  
釣る、

そして酒に弱い兄貴を酔わせて楽しむ・・・

裁かれるべき悪業の数々、神様が許してもこの俺は許せない。

なんだか良くなきが姉ちゃんはやたらと俺ばかり標的にする

のだ。

黄児は溺愛といつてもいいくらい休みの日は可愛がつてゐし、俺と年が近いみどりも同じくらゐ遊んでゐる。

兄貴は、たまに酒を飲ませたりするが基本的には仲が良い。

俺だけだよ・・・・・

なんでそうなの？ねえどうしてなの？

兄貴やみどり、黄児を車で跳ねないのはどうして？いや、跳ねてほしい訳では無い。俺を跳ねないでほしいの。

俺、姉ちゃんになんかやつたわけ？なあどうしてだ。  
・・・面と向かつて聞けたら楽だろうな。

聞いたらますます面白がつて悪戯がエスカレートしそうだから、怖くて聞けない。

そうだよ、俺は弱虫だ。だから仕方ないじゃないか。

「・・・・・戻るか」

朝の散歩に出かけたがやつぱりもやもやする。

それに、寒い。12月だから当たり前だけど、真冬にはまだ早いのに。

今からこんなだつたら本番はどうなつてしまつんだ？

家に戻るともう8時だつたが母さん以外は誰も起きてなかつた。軽く挨拶の会釈を済ませ、自分の部屋に戻る。

「最悪~~~~~！~」

そしたら人のベッドに寝てやんの、あいつが。何してんのこの人？なんで自分の部屋で寝ないの？やめてくれ・・・真冬なのにTシャツにパンツだけという、防寒も

へつたくれも無いスタイルで寝るのさ。

「…………」「

馬鹿姉は俺に気付き、顔を上げた。

瞼が微かに開きかけていたが、すぐにまた眠りに落ちる。

「邪魔すんなよ、寝たいからあっち行け」

「…………」「

「無視すんな……」「

すると姉ちゃんはめんどくさうに尻を持ち上げた。  
「、この体勢は、やばい。今すぐに逃げなくては！」

“ぶう～～～～～～～～～～、プスツ”

し・・・・・しまった・・・・やられた・・・

しかも間延びしたくせに、歯切れが悪く最後に小さく途切れたのが  
余計にむかつく。

いやあ頭にくるね。返事をいつこう形でされるつてのは。  
まるでお前が出ていけと言わんばかりの行動だな。

うわあこれは酷い。

毒ガスが俺の部屋に充満してゐる。

「窓開けるなよ、寒いでしょ」

「嫌なら原因を作るな。この悪臭女」

「そりゃあんたでしょ。汗臭いわねこのベッド」

「だったら自分のところで寝る。早く出でていってくれ」

「疲れてんの～・・・異の部屋、日当たり良くてあつたかいんだも

ん・・・

暖を求めているのか。だつたら厚着して寝る。

まったく、いつまで人の部屋に来るつもりなんだよ・・・。もう俺は高校生なんだし、普通の姉弟なら自然に壁が出来るはずだ。だが姉ちゃんはそんなお構い無しだ。

下手すれば未だに一緒に風呂に入ろうとするかもしない。仲が良いにこした事は無いが、多少の線引きみたいなのはなればおかしいよな。

とにかく、姉ちゃんといふとそれだけで疲れちまつ。

でも他のみんなはあまり嫌がる素振りは無いんだよな・・・。やたらと家中で姉ちゃんは家族に呼ばれる事が多い。

そういうや、いつも誰かしらと一緒にいる事が多い様な・・・。

「巽いー」

寝呆け眼で姉ちゃんは俺を呼んでいる。

なにをにやにやしてんんだ、キモチ悪い奴だな。

でも何故か、理由は無いんだけど近くに行きたくなつて近付いた。やられたらやり返せる様に警戒していたが、あつさり捕まってしまう。

カメレオンか食虫植物に捕まるハエもこんな気分なのかな。そのカメレオンか食虫植物は、闇延びした屁をいくつだらうか?

「は、離せ!」

「んーーー、やつぱり巽はあつたかーい」

まるで抱き枕みたいに俺を締め上げる姉ちゃん。  
あ、頭に血が昇ってる・・・苦しい・・・やめひ・・・!

「離せえ・・・姉ちゃん、やめろおおおーー！」

「いやだ。下手な布団や毛布よりあつたかいんだもん」

何が哀しくて日曜日の朝からこんな日に遭わなくてはならないんだ？  
俺はいい歳した姉ちゃんに抱き付かれて喜ぶ趣味なんて無いぞ。

「ねえ、巽」

「・・・・・・・・・・・・

息がかかる距離にある、姉ちゃんの顔。  
寝起きだから当然化粧なんかしてないんだけど、肌は綺麗で眉毛も

しつかり残っている。

「覚えてる？ あんたがちっかりこ頃はよくひつしてたんだよ  
「いつの話だ・・・」

「覚えてないか。そもそもウソだし」

「呼吸するみたいに出任せを言つくな！」

「それも出任せ。さあ、どうひだりねえー・・・・

「おい、姉ちゃん？！」

・・・・・・また寝ちゃった。

おいおい、せめて腕はほどいてから寝ろよな。

そういうや姉ちゃんの長所って結局なんだつたんだろう・・・?  
しいて言つなら不思議と周りに人が寄つてくるところ、だろうか。  
ん？ なに、無理矢理まとめた感じがする？  
ああ・・・聞こえない・・・  
あーあー・・・聞きたくない・・・

なんだか眠くなってきたぞ。姉ちゃんの眠気が伝染したか。

いつもに比べたら今日の姉ちゃんはまだましな方だな。

じゅ、おやすみ。

続  
く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0460z/>

---

進藤家の人々

2011年12月5日19時50分発行